

専門が専門ですから「進化」という言葉には敏感です。「オリンピック選手が進化した！」とか言われるともうね。それで前に、新聞記事で「進化」がどのように使われているのか数えたことがあります。結果、夏場の進化大発生が判明。なぜって恐竜。夏休みに各地を恐竜博が巡業するんです。たしかに子供は大好きですよ。甥っ子(4才)なんか、手だけの写真でも「□●△ロドン！」と即座に名前を教えてください。何を見せても瞬殺なので本当に合ってるのか疑念がないでもないですが、まあ知らぬが仏。

恐竜といえば、最近、続けざまにカメとトカゲの論文を読んだんです。これがもう面白い。まずカメ。カメが他亀の視線を追うっていうのです。「おや？」と一匹が視線を動かすと「ん？」とその先を追う。それでトカゲ。トカゲは真似するってんです。それも真の模倣。イミテーションですよ。ということは、こういうのが有羊膜類に共通する特徴の可能性があるってことで、つまりはTレックスが他亀の視線を追ったり、トリケラトプスが模倣したり、ひょっとしたらそんなことがあったってことで、これは興奮を禁じえません。

論文そのものも味わい深いものでした。まずカメ論文(Wilkinson et al., 2010)。カメの視線追跡なんてどう実験したのか。水槽の中央を金網で仕切って両側にカメさんに入ってもらう。それから金網の上の方にボードを立てて一方の側にレーザーポインタを照射する。カメが「おや？」と首をもたげますね。それを見たもう一方が「ん？」と首をもたげるか。それを数えた。実験の様子を描いた図が論文にあるんですが、「おや?」「ん?」というカメの表情たるや、正直、癒やされます。ぜひ皆さんにも見てみて頂きたい。他にもカメが飽きちゃうから各色のポインタを用意したとか、参加カメ全てが年齢不詳とか、性別不詳が半分(4匹)いるとか、それなのにエミリーなんて名前がついてるとか、カメ論文には言いたいことが山ほどある

んですけれども、トカゲ行きましょうか。

「真似」ってのはなかなかやっかいなテーマで、「真の模倣」というからには、結果だけでなく、そこに至る体の動きがコピーされなければならない！ってんで、大の大人が子供相手に、わざわざ両手縛って頭でボタンを押してみせるとか、そういう世界。トカゲでやるのも中々大変だと思うんですが、一匹にドアを頭でスライドして開けるようshapingしたんですね(Kis et al., 2015)。それをビデオに撮って他蜥に見せる。左右反転バージョンのビデオを作っておくわけです。右から開けるのを見たら右から、左からなら左から開けるのか。もちろんちゃんとやる。イミテーションだ！

とても面白い実験だと思うんですが、その様子を描いた図が。まず、大して必要もないのに実験者がわざわざ描いてある。そのくせヒトやトカゲは雑なポリゴンみたいなカクカクの線で描かれていて、目鼻も省略。表情なんか分かりません。その一方で実験用ケージの床の新聞紙はリアルに再現されていて「EL PAIS」紙を使ったことまでわかります。どうしてこうなった。

読み返して見るに、カメ論文では参加個体全ての名前が書かれています。アレクサンドラ、エミリー、モリーなどなど。しかしトカゲたちはID番号で呼ばれるのみ。「そりゃ雑誌が著者の流儀だろう」。そうかもしれません。でも掲載誌はどちらも*Animal Cognition*。そしてカメ論文の第一著者のWilkinsonさんがトカゲ論文の最終著者なんです。どうやら学生時代に書いたのが前者で、ラボを持ってから書いたのが後者。それなのにこの違い。試しにDr. Anna Wilkinsonで画像検索してみましようか。



Profile — 平石 界

東京大学大学院総合文化研究科博士課程退学。東京大学、京都大学、安田女子大学を経て、2015年4月より現職。博士(学術)。専門は進化心理学。